
神の選択と抗う絆

鷺崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の選択と抗う絆

【Zコード】

Z7349Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

突如隼の前に現れた死神テトラは隼に願った。
世界を救つてほしい、と。

隼は強引にテトラに異世界に転移させられるが、隼はどうすれば世界を救えるのかを教えてもらつていない。

異世界という変わり果てた日常の中で隼は、闘い、出会い、別れなどを通して隼は成長していく。

そして、成長した隼はテトロが言つた、「世界を救つてほしい」と言つ葉の真の意味を知る。

そんな中でも隼は築こうとする本物の絆を。

円2更新を田標にがんばります。

00 まぬけな死神と意外な展開（前書き）

序章
壊された日常

そこは、ある人の過去。

その場には一人の小さな、小学校中頃と思われる少年と、もう一人、荒々しい雰囲気を漂わせている中年目前くらいの男性がいる。男は少年に怒っている。激怒である。

少年の身体の至るところにむこうたらしい痣が大量にあつた。ぱつと見ただけで十は確実に越えていくことが分かる。明らかにその男に暴行を受けていた。

いや、今も受けている。

男の両手は少年の首を絞めている。

しかし、少年の顔には恐怖の色が窺えない。

涙も流していない。

代わりに擦れたら声で、恐れてもなく、泣いてもいないのに不思議なのが、必死に言葉を紡ぐ。

「う、ごめん…なさい。に、どと…あんな、こ、と…い、いま、せん。ゆ、ゆるして…くだ、さい。

……さん」

男は少年が発したこの言葉に、呼ばれ方に、さらなる怒りを見せた。

「俺をそう呼ぶんじゃねえっつってんだろ…」
この「がつ…！」

学校から帰宅後、荒神隼は学ランと言つ特徴のまったく無い制服のままなんとなく気が向いたので、近くの飲食店に入店している。

高校を入学し、一ヶ月が経ち、ようやく高校といつものにも慣れ始めた、と言える程にはなつてきたが、やはり疲れているのだろう。

隼はわざわざ窓側の席に座らしてもらい、適当にメニューを選ぶ。その後、店員に注文し、すぐに机に伏して寝始めていた。

そして、ようやく隼が目を覚ました。

「…………夢、か……」

隼の顔には嫌な汗が垂れていた。

隼はそれを拭い、そして携帯を開いて時間を確認する。時刻は六時半を回ったところだった。

「…………二十分ってここだな……」

二十分、とは隼が寝ていた時間であった。

注文した物がくるには遅いが、夢を見るには、いたしか早いのでは、と思う経過時間だった。

徐々に徐々に隼の頭は覚醒していくその時。

突如、隼の目の前に一台の車が現れた。

車の中で運転していたのは、中年の男性だった。

いや、運転していると云う表現は適切ではないかもしれない。

彼は意識が無さそうだった。おそらくは寝ているのだろう。

だから店に突っ込んできているにも関わらず、減速する気配が窺えない。

確実に自分に当たることが分かる。

しかし、頭は動いても身体は動かない。動かなかつたのだ。
隼は反射的に強く目を閉じ、身体を強張らせた。

店内には窓ガラスが破壊される音と同時に赤い液体が飛び散り、
潰された肉片が弾けていた。

「……生きてる?」

それが、恐る恐る目を開けた隼の第一声であつた。
隼はいつの間にか寝転つている状態になつていた。

(……車にひかれたけど、当たり所がよかつたとか?)

そう考えながら隼は普段通りの力の入れ方で、まず上半身を持ち上げることで、まずは上半身を持ち上げてみる。

「……痛く、ない?」

なぜか隼は全く痛みを感じることなく上半身を持ち上げることができた。

「たしかに、俺は車にひかれた……よな?」

もはや、車にひかることすら半信半疑の状態である。

特に、目を閉じていたため、車と衝突した瞬間を見えていないことと、痛みが全く無いことが隼の頭を余計に混乱させていた。

「んー…………ん？ あれ？ ここどこ？？」

隼は今まで気付かなかつたのだが、ふと、辺りを眺めてみると、そこは明らかに先程までいた飲食店ではない。

一番おかしな点は、自分でも今までどうして気付かなかつたのかと思ふレベルのことなのだが、隼は今、自身の身体ですらも見えない程の暗闇の中についたのだった。

「 やつと目が覚めたな。待ちくたびれたぞ。あと5分、目が覚めるのが遅かつたら叩き起しすとこだつたぞ」

不意に、頭上から声が聞こえた。

その声の主は口調こそ男のよつとなといもあるが、声色は若い女性のものだった。

「 ……誰？」

当たり前の疑問が隼の口からこぼれた。そもそも隼はどうしてここにいるのか、自分でも分かつてない。

「 そうだな……まあ、私のことはテトラとでも呼ぶといい。確認しておぐが、お前の名は荒神隼で間違いないな？」

「え、ええ、そうですけど…どうして俺の名前を？
そもそもあなたはいったい…？」

彼女は素早く隼の意を汲み取つて、こう話を続けた。

「おつと、呼び方なんてどうでもいいな。私が何者なのか、だな」

「…そうです。あなたは何者なんですか？」

「私は…そうだな…お前達、人間に死神と呼ばれている存在、と言つところかな」

「…え？」

隼は、何を馬鹿なことを言つて言つているんだ、と思いもしたが、

それ以上に、言い方こそ雑だが、テトラは本気で言つてゐるよつて感じられた。

「本気で言つてこます?」

「ああ、本気だとも」

テトラは一瞬たりとも間を空けることなく断言した。

「……」

「……証拠を見せてもらひませんか?」

「まあ、よこが……その前に堅つ苦しい話し方やめにしないか……昔のことを忘れるとは言わないが、もう少し器用にできないかのか?」

「……」

テトラのその言葉によつて隼の頭の中に昔の記憶が蘇る。そして、それが彼を覆いつくそうとする。恐怖によつて。

「すうー……はあー……」

隼は大きく深呼吸することによつて、どうにか落ち着きを保てた。

「どうしてそのことを知つてこるのかは、分からせんが、まあ、証拠を見せてください」

「分かった。分かった。」

……ふむ。さて、なにをすればお主に認めてもらひえるものか……?」

「……」

しばしの沈黙。

そして、テトラが話しだす。

「……よし……」

ならばここで人の理を越えた力を見せれば、認めてもらひえるか?」

「じとわら

「……分かりました。本当にそんなことができるのなら、認めましょう」「

と呆れたよつて言つたものの、テトラのその自信に溢れた物言いが隼を不安にさせる。

「では、いくぞ…と、その前に隼、頭上をよく見ておけよ」

「わ、分かりました」

隼は、ごくり、と唾を飲み込む。

そして

頭上から一筋の雷が隼に向かつて、落ちてくる。
直撃を免れそうにはない。

「つ…！」

いや、すでに直撃していたようだった。

当たり前だが、雷は光の速さを持つため、隼がその雷に気付いたのは直撃したと同じ時である。

だが、それが自らに向かつて落ちてきたと言つては認識できた。

また隼の目は暗闇の中にはいるせいで分かりにくいが、その眩しさによつて焦点が微妙に合つていらない感覚が残つている。

「どうだい？ 信じてもらえたかな？」

呆然としている隼にテトラは尋ねた。

「…え？ ああ……いや、少し待つてくださいっ！」

俺は雷に当たつたのでは…？」

隼は死んでいない。それどころか、痛みすら感じていない。
だから、このよつてな質問が出てくる。

「ん？ ああ、今のは雷ではない。今のはな」

「才能」と並んでの光だ

「……は？」

目が覚めてから、驚くばかりの隼だが、その行為が無くなる気配は一向に無かつた。

それ以上にもはや聞いたことが間違いだつたのでは、と思ひよつになつてゐる次第だ。

「とは言つても光はただの演出なんだがな。見えないままお前の身体に突つ込むこともできたが……まあ、私には光を操る力もある、と見せつけるためだ。人間はできないだろ？」

「……分かりました。信じることにしましょつ」

「助かる」

隼は何とも言い難い思いがあつたのだが、一応はテトラのこと認めることにした。

いや、認めざるをえなかつた。

「それで？ その死に、が……！」

隼はテトラを死神だと信じた後になつて、ようやく気が付くことがあつた。

それは、事故にあつたこと。

「そう、か……俺は死んだってことですか……」

それなら完全に納得……とまではいかないが、わずかに納得できるところがある。

「魂の回収……」

「いや、違うが」

「えつ……！」

「……」

テトラは当然の様に隼の発言を否定した。

隼は恥ずかしいことを眞面目に言つたからだろうか、顔に熱を感じ、赤くなっているのが自分でも分かる程に顔に出てゐる。

おまけに頭上ではテトラが面白がっている気がしてならなかつた。

「な、なら、何が目的なんですか？」

恥ずかしさを隠すために、話題を変えようと質問する。

それに対してもテトラは一拍おき、真剣な声で話しだす。

「…私がお前を呼んだ訳は…隼…お前に世界を救つてほしい…」

隼は、もはや何に対しても、どう驚べきなのか、分からなくなっている。

つい先程、意味の分からぬ力を見せつけられ、ありえない存在を認めさせられ、とうとう、隼自身に対しても理解できることを求めてきた。

隼はもう何も言えなかつた。

「理解しがたいのは分かる。だが、もはや時は一刻を争つのだ」

私達にもお前にも。

「……え？ 僕にも？」

「そうだ。まず、私が言つてゐる『世界』とはお前が思つてゐるようなものではない。」

隼は首を傾げた。

しかしテトラは仕方ない、と言つ風に話を続ける。

「お前に分かりやすく言つなれば、救つてほしいのは全ての縦軸、つまりは過去、現在、未来と言つ時間。そして全て横軸、それは世界毎の繋がりと言う平行世界だ」

テトラは真面目な口調で話している。

隼も言葉としての意味は分かる。

だが、ただ、それだけでしかない。

「まあ、お前にはある地に赴いてももう必要がある」「……その前に聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「あの、俺は死んだはずではないのですか？」
隼はテトロの言つ『世界』は理解不能とし、一番気になつていていたことを聞いた。

「ん？」

「ああ、そうだな……そのことについても話さないとならしいか…」

「そうだな……ふむ、どこから話すべきか…」

隼の額から汗が流れる。緊張しているのだろうか。

そして、テトロは再び口を開いた。「よし…!
やはり、まずははじに行つてもううからだな。隼、お前には

異世界に転移してもうう。

「……」

「……」

「……」

「さて、その異世界とはな

「ちょっと待つてください…！」

「まあ、黙つておれ。まずは私の話を全て聞け」

そのテトロの声は今までのものとは、またしても異なり、相手に有無を言わさないものだった。

「……分かりました」

「よし。まず、その世界のねはうひうの世界の言語で言つと『始まりの世界』と叫うところか。

そこはな、この世界で言つ神話の世界だ。

いや、そもそもこちらのいくつかの神話はもともと、あちらの世界での実際の出来事だ。それが空間の歪みによつてこの世界に投影

され、伝わつていった。

そんな、お前達の世界ではありえない闘いの世界こそが『始まりの世界』というわけだ

(……これはどう反応すればいいのだろうか?)

隼は黙つておくよう言われたため、一人心の中でそう呟いた。

「次にお前がそこに行かなければならぬ訳なのだが……いや、その前にあちらの世界の現状を話そつか」

(何か深刻そうだな…)

テトラの声は話すたび、話を聞くたびに雰囲気が大きく変化し、今は深刻そうに語つていることがすぐに分かる雰囲気を醸し出している。

「今、あちらの人間は神々を殺そうとしている……いや、違うな……そう、神の干渉から逃れようとしている、と言えば分かるか?」

(……分かりません…)

むしろ分かる人なんているのだろうか、とも思つてゐる。

「神はいる。その事を頭に入れて聞くがよい。

それで神つて存在は世界の管理をしている。基本的に人間からの干渉は出来ないのだが、あちらの世界の人間は神を人間界に引きずりおろして……殺した」

(……それはどのくらい凄いことなんだ?)

「神はな、人間界だと本来の力の百分の一の力も出せない。人間も水中で走ることは難しいだろ?

それと同じだ。神とて人間界では闘いにくらい。おまけに人間は神

を強制召喚させる際に、さらに百分の一の力しか出せなくする結界を張つた。要は一万分の一の力も神は出せない。そして、殺されたテトラ自身も死「神」のはずなのだが、同じ「神」が死んだことを全く気にしていなかの様に話した。

（……人間もやるなあ……）

それに対しても隼は感心していたのだった。

「下級神が殺されるところまでは別に上位の神々は気にしていなかつたのだが、その後、人間はとうとう中級神まで殺してしまつた。そして上位の神々……上級神以上が人間を危険視し始めた。とは言つても上級神以上は、たとえ一億分の一しか力をふるうことができなくとも負けることはないのだが。むしろ圧勝だな。

おつと、それはどうでもいいな。

それでだ。

神が自ら人間界に降りることは神々のシステム上問題があつた。だから神は『人間』を使うことにした

テトラは大事なこともスラリと、会話の流れで言つ。そういう性格なのかもしけないが、テトラにとつてどうでもいいことと言える範囲だからであろう。

そもそも、その大事なことはテトラにとつて、ではなく、隼にとって、なのだから。

「は？

それはどういうことですかっ！？」

今まで我慢していたが、とうとう隼は声を出してしまつた。しかし、テトラも特に気に怒つたりする様子もなく話を続ける。

「他の世界の人間をあちらの世界に潜り込ませ、滅ぼさせるために、だ。ただ、リスクも大きかつた。世界を渡ることの成功率は一パーセント未満。

そして失敗したら魂は……消える……

テトラは重そうに語るもの、隼には魂という物がよく分からないため、テトラに尋ねる。

「魂が消えると、どうなるのですか？」

「……一つの魂が消えることで数万人の人間が……消える……」

「？」

待つてください。どうして魂一つで数万人の人間が消えるのですか！？」

「……世界ってものはな、神ですら幾つあるのか分からんんだよ。例えばお前たち人間が知っている神だつていいだろ？」

だけど、そいつらはほぼ全て下級神。

そりやそりや。人間社会であつても、わざわざ、どうでもいい土地に上役が足を運ぶか？

普通無いだろ。それは部下の、下つ端の仕事だ。

だからお前たちが知ってる神の上には、お前たちの知らないの神が、その上のさらなる神が、と人間ごときが知ることができないことがばかりで世界は構成されている。

それと同様に、私達ですら知らない世界が、知るよしもない世界がある可能性もある。

そして魂は一人一つではない。世界を越えて繋がっている。それは確かだ。

だから……

「なら、どうして死神が俺に接触してきたんですか？」

一度話しだしたら止まらない。だが、テトラも怒ることはない。黙っていた意味はあつたのだろうか、とさえ思えてしまう。

そして、今の隼の発言。気がつくと隼は何気なくテトラのことを

死神と言つていた。

隼はいつの間にか疑いが完全に消え、テトラを死神と認識した様に見られる。

「うむ。それでなその魂の消滅のせいでの世界のシステムが壊れ、世界が滅んだ。それも既に数百は越えている」

「えつと、その神々のシステムとか世界のシステムって 」

「何なんですか？」

「そう聞こうとしたが、できなかつた。」

テトラの声が隼の声を遮る。

「なぜなら、

「なつ ！ ！」

「くそつ！もう時間が無い。今すぐあちらに送るぞ……」

急にテトラが焦りはじめたからだ。

「え？ えつ！？ それって魂が消え 」

「大丈夫だ。そのための『才能』をお前に『えて』ある。あちらの言語も頭の中に突っ込んである。だから頼むぞ。世界を救ってくれ」

「ちょっと待 」

そして隼は意識を失つたのだが……彼には意識を失う前に言いたいことが一つだけあつた。

だから、結局何をすればいいのですか？！？

そう…テトラは隼に「世界を救ってくれ」とは言ったものの、何をどうすればよいのか、といつ点については一切教えていなかつたのだ。

01 異世界と新たな出会い（前書き）

すみません。

また誤字が発見されました…

第一章

異世界突入編

「…………んつ…………ん」

荒神隼は何か生暖かい物にべろり、と頬を舐められた様な感覚と共に目を覚ました。

「…………こには…………？」

まだ意識がはつきりとしていない中、隼は周りの状況を確認しようと辺りを見渡す。

そこは見渡す限り木しかなかつた。密林地域とでも言ひのだらうか。そんな場所にいた。

他に気になることと言ひつと、隼の隣に何かの生物がいることである。

そいつは隼が今まで見たこともない生物だった。

（…「トイツは犬か？ 犬なのか？

…見たところ、こには山か森の中なんだらうけど、この犬っぽいのは何だ？？）

そう自問してみると、隼はようやく思い出した。

テトラに異世界に送られたことを。

「ここが異世界、か…………」

隼は感慨に浸る、といつわけではない。むしろ本当に異世界なのか、どうか疑つていたくらいである。

隣にいる生物の頭を撫でながら、隼は呟く。

「はあ……結局俺は何をすればいいんだろうな……そもそも何で俺なんだ？ 才能の光つてなんなんだよ？

……いや、その前に必要なことは何も言われてないよな……」

そして、隼がぼんやりとしていると、先程の生物が隼の足に類をすりつけてくる。

その生物の身体の大きさはまるでチワワの様に小さく、隼は何も知らないが、たぶん何かの子供だらうなと思った。
この大きさで大人という可能性もあるのだが。

その全身の太さはチワワより断然太く、体毛は真っ白な毛できれいに整つていて、触り心地がたまらなく良かつた。
だが、犬にしては顔つきが少しおかしい。

確かにかわいらしいのだが、犬とトカゲを合わせた様な顔つきをしている。

「きゅーー？」

その生物は、まだ鳴きながら隼の足に類をすりつけ続けている。
(俺の顔を舐めたのも、コイツだろうな)

隼はのんびりと考えているが、よくよくその生物を見ると驚くべきモノがあつた。

「これは羽根だよなあ？」この生物の背中にある鳥の羽根のような物を優しくつまんでみる。

その羽根の大きさだけを見るならばさほど大きくはないが、身体の大きさと比較して考えると中々のものである。

犬とトカゲを混ぜたような顔をし、四足歩行で白いふさふさの毛を持つている。そして大きな羽根が生えている生物。まとめるところにうことになる。
犬でないことは確定していた。

(……なんかドラゴンみたいだな……)

と、冗談半分で思つたが、テトラがこの世界は隼が元いた世界の神話に出てくるような世界、だと言つていたことを思い出した。

それなら、これもありえるのか、とそこで考えるのを止め。

「よいじょつと」

隼はその生物のことを見つけて立ち上がつたものの、隼には「」がどんな所なのか見当もつかない。

「まあ、適当に動き回つてみるか…」

まずは人を探すべきか、と隼は一人頭の中で提案し、即決した。そして街に連れていくてもらいたい。

今は何よりも情報が必要だと思つてゐるのだが、それ以上に野営などしたことない隼にとっては、山の中で夜に一人でいることが、とても怖く、怯える姿が隼自身でも田に浮かぶというのが大きな理由である。

度胸がないな、と自虐すらしていた。

しかし、そもそも人がこんな所にいるのか、と言つてみると、問題であることは口にださなくとも、誰もが思つてゐるだろう。隼も当然理解している。

「ぴやあー！」

そう考へながら歩き始めると、この生物も隼の横に並ぶようしてついてくる。

「しつ、しつ。」
「ち来んな！」

隼は手で追い払うようなジェスチャーを見せながら言つが、。

「ぴゅう？」

「あー、絶対にわかつてないな。…まあ、当たり前か。

……なら、まずはコイツを引き離しておくか

こんな小さな生物でも、どんな習性のある生物か分からぬのだから、いきなり襲い掛かってくる可能性もある。

だから、隼は早くこの生物を引き離したいと思つてゐる。

そして、走つて逃げようか、と隼が思つていた時だつた。

近くの草木から、ガサガサと音がした。
隼はその方向に素早く振り向く。

「ふ」おおおお

そこからは奇妙な生物が、雄叫びをあげながら出てきた。
一瞬、人間かと思つたがまったく違う。

その生物は一足歩行という点は人間と同じなのだが、他が大きく異なつてあり、皮膚は濃い緑色をし、瞳の中は全て真っ黒、黒目しかないように見え、耳は人間のそれよりもはるかに尖つてゐる。

身長は一メートル程であろうが、筋肉の付き方が異様で気持ちが悪い。

相撲取りよりも太い体つきなのにも関わらず、それが全て筋肉でできているように思わせる程の締まり具合である。

そして、その手の中には太い木でできた丸太の様なものが鷲掴みにし、真新しい赤い色、おそらく何かの生物の血が付着していたのであらうが、そんな色も付いていた。

「ふ」おおおお

そいつはそう叫びながら隼を再度睨み付け、襲い掛かってきた。

「クソッ！ 僕が何をしたんだよ！」

涙目になりながら全力疾走する男がそこにいた。

「はあ、はあ、はあ」

地面が柔らかく走りにくかつたため、隼は十分以上走り続けて、よつやく先程の生物を撒くことができた様である。

「ぴやああ！」

「なつ！」

隼はあまりに本氣で走っていたため、全く気が付かなかつたのだが、その声の主である小さなドランのような生物は隼の背中にくつついていた。

そしてようやく息が整つてきた頃、近くから音が聞こえてくる。その音はまるで滝が流れ落ちているような音であった。

「……水……水」

今しがたの逃走で、すでに隼の喉は渴ききつている。

水に飢えてた隼は一田散に音がどこから聞こえるのかを聞き分け、足を進め始めた。

小さな生物も付いてこよつとするのだが、隼には振りほどく余力はどこにも存在しない。

予想通り、歩いてすぐのところで滝を見つけた。

その滝の下にある小さな湖らしき所には、底が透けて見えるほど綺麗な水がある。

隼は早速、勢い良く、大量に水を飲む。

「……？」

水を飲み終えると、なぜか隼の身体は火照ってたまらなく感じる。それは走ったから暑い、というわけではない。その熱はすでに引いていた。

しかし身体の内側からは止まることなく熱が生まれ続けているような感覚がある。

（まさか、この水、飲んだらやばいのか！？）
そう焦っていると、とたんに身体の熱は消えた。

本当はこのことについてもっと考えるべきだつたのかもしれないが、そんな考えは頭の中から飛んでいく。消え去ったのだ。
なぜなら、顔を上げた隼にとつてそれ以上に驚くべきことが待つていたからである。

なんと、田の前には水浴びをしている女性がいた。
無論、水浴びをしているのだから裸である。

その女性は隼に背を向けていたため、ビのよくな顔をしているからは分からないのだが、肌の色はとても白く、髪は灰色のものを腰まで真っ直ぐに伸ばしている。

身長は一六センチメートル程で、締まるべかといは締まつて

いる風な女性だ。

「……って何してんだ、俺…これ、覗きだろ…」

隼は一人そう呟いた。

あくまでも独り言だったのだが、思わぬ存在がその言葉に反応してくる。

「ぴやああーー！」

もちろん、先程のドラゴンの様な生物の声である。

「えつ！！！」

「あつ！」

隼も水浴びをしている女性もその鳴き声に反応してその生物の方に振り返った。

だが、すぐに隼はもう一度その女性の方に振り返る。

その女性はとても美しかった。

おそらく、隼との年齢の差はあまりないだろう。

そのため、顔も少しあどけなさが残っている。

そのためなのか、かわいいと言う表現でも合っているような気もする、が、やはり最後は綺麗や美しいと言う言葉が相応しこと/or思えた。

た。

大きな灰色の目。

そして先程言つたようにあどけなさが多少残つているが、それも本当に多少であり、顔立ちは全体的に整つている。

隼は彼女に見惚れていた。

(……ヤバッ)

二人の目が合つたと同時に隼が我に帰つた。

(どうする、どうするよ？)

いや、待て、落ち着け、俺。今この場面なら、逃げるべきか。いや、だめだ、だめだ。ここがどこかもわからないんだぞ。それに、さつきの危なっかしい生物もいるんだぞ。

：謝るしかない！）

以上のことを隼は、この時のみ異常に活性した脳によつ、わずか数秒で結論を出した。

そして素早く、深く頭を下げた後に謝罪する。

「す、すみません！！

本当に覗こうなんて気はなくて」

そのまま謝罪は続けながら、隼はチラリとその女性の方を見た。勿論、下心などではなく、彼女がどんな反応をしているのか気になつた、と言つう理由である。

もしも、隼が思つてた以上に彼女が怒つていたのならば、せりふ誠意を見せなければならぬ。

また、逆に彼女が恥ずかしがつてゐるような反応をしてゐるのなら、断りを入れてから一旦この場から退いて、少し離れた所で落ち着くのを待つた方が良いかもしぬれない、といつ考へがあつたからである。

そもそも、こんな焦つた時に下心が働く訳がない。

今回覗いてしまつたのは、完全に偶然。隼にとつても不意討ちなのだから。

「えつ…！？ 白…！？」

だが、彼女の反応は予想していないものだった。

彼女は何に対してなのは分からぬが、「白」と言つて驚いていた様子でいる。

何が白なんだろうと思つが、すぐに、この生物のことか、と隼が納得したその直後、彼女は近くの岩に隠れて、隼に問う。

「み、見た？？」

彼女は僅かに顔を赤らめていて、可愛らしかつたのだが、隼は何か、本当に自分でも何を感じているのか分からぬのだが、彼女の奥に別の感情を感じてたまらなかつた。

（「）これはどう答えるのが正解なんだ？
見てない…とは言えないし、ほんの少しだけ、つて言つべきか？？

）しかし隼はそれ以上に返答の方に思考が働き、一人苦悶している。そうしていると彼女はもう一度尋ねる。

「見たの、ですか…？」

それと同時に彼女は少しづつ何とも言えない表情に変わっていく。
「そつか…見たんですね…」

暗い、暗い、悲しみの表情であり、諦めの…負の表情。

その表情を隼は、まるで見慣れたものに感じ取れていた。いや、感じ取れる。

直感なのだが、もしかしたら自分と同じような境遇の人なのかもしない そうではなくとも苦しい過去があつたのだと隼は思つ。

そして、彼女はその表情のまま小さく呟いた。

「…………私の髪を……」

「そつち！？」

隼は思わず頭を上げてしまつた。

「あつ……」

「あつ……」

二人の視線が再びぶつかり、隼はなぜか、一度目にならぬ視線がぶつかった時は焦つただけだったのだが、一度目になると顔が赤くなってしまった。

それに対しても、彼女は目が合つた瞬間だけは驚いていたようだが、その後すぐな負の感情しか見受けられない表情に戻つていた。

隼はもう一度素早く頭を下げ、

「い、ごめん。あ、あの……えっと……」

気が動転して何を言つて居るのか分からぬ隼に彼女はもう一言、言葉を掛ける。

「いいから……気にしなくていいから早くどこかに行つて」

その声はどこか、いや、一言一言、全てが寂しく感じられる声だった。

(……髪のことと何かあつたのだろうな……)

もしもそつなれば、ここは何も言わずに立ち去つた方がよいのかもしれない。下手なことを言えれば余計に相手を傷つけることになるからだ。

隼はそう思つて居る。

だけど

隼は立ち去る前に口を開いた。

どうしても彼女の顔が、心の奥底に突き刺さる。

そんな顔は見ず知らずの人でもしてほしくない、と。

だから、できるだけ優しい声で、

「ごめんね。髪も見えたんだ」

声を張り上げて、

「だけど……」

そして再び優しい声で、

「綺麗な髪だったよ」

そして、後ろに振り向く。

本来なら隼はここまで頑張る必要がないのだが、彼女のあの悲しそうな顔がどうしても頭から離れなかつた。

だから頑張つた。

そう 頑張つたのだ。

隼は昔の出来事のせいで、人と会話をするときに砕けた話し方で話そうとすると異様に緊張してしまつ。

対人恐怖症と言つわけではないが、緊張する。いや、それでもない。緊張とも少し違う。堅い口調 敬語と言つわけでもないなら緊張することなく会話ができる。

だが、砕けた口調では話せない。

だから、優しく話すことは隼にとってとても大変で、苦しいことだった。

そして隼はそのまま去つとした。

だが、その時、

「待つて！！」

後ろから隼を呼び止める声がした。

隼は耳を疑う。

なぜ、俺を引き止めるのだ、と。

彼女は続けてこう言った。

「もう一度……さつき言つたことをもう一度言つて」

上手く聞き取れなかつたのだろうか、ただそれだけか、と納得し、隼は深呼吸をしてからもう一度、優しく言つ。

「ごめん。髪も見えたけど、綺麗な髪だったね」

「……本気で言つてる?..」

「ん? ああ、本気だよ。真つ直ぐなめらかに伸びていて、それに

灰色の髪つて見たことなかつたけど、とても綺麗だと思つよ

彼女は数秒隼を見つめて、そして、

「…………っ！」

なぜか顔を真っ赤にしていた。

「えつと、俺なんかおかしいこと言つたかな？」

「…………少し」

「えつ？」

「少しそこで待つて！」

彼女は隼の予想の右斜めはるか上空を通り抜ける言葉を言い残して、近くの岩場に向かつた。

服を着るためであろうが、その際に隼が見た彼女の目には涙が浮かんでいた気がしたのは、ただの気のせいだろう。

彼女が行つてしまつた後、これは失敗したのかな、何も言わなかつた方がよかつたのか、と隼は不安がついている。

「…………ふうー

隼は一息つく。

不安だらうが、少し疲れていた。

だが、その疲労感は少しであり、思つていた程は疲れていなかつたことと自分でも思いの外、スラスラと言葉が出てきたことは意外だつたと思っている。

(髪が綺麗だと思ったのは本心だつたからかな)

その時隼はふと、気付く。

(あれ？あの生物どこ行つた？

……まあ、いつか。巣にでも帰つたんだろ)

隼は近くの岩に、少し濡れているのが気になつたが、座り、（これからどうなるんだろうな。つたくあの馬鹿のせいで）と口には出せないものの、愚痴を溢している。

「あの馬鹿」とは、隼をここに強制的に転移させた、まぬけな死神だと呟つひとは、誰もが分かっていることだらつ。

そして今度は、はあ、と溜め息を吐き、目を瞑り、空を見上げ、身体でこの世界　とは言つても、絶対にここがこの世界の中心ではないのだが、始めて来た土地を感じる。

空氣は少し湿っぽくあるが、このよつたな場所のため、仕方ないだらつ。

それでも汚い空氣とは思えない。むしろ新鮮な空氣と言えよう。気温は、ちよつと暖かくて心地良く、たまに吹く風も暖かくて気持ちいい。

日本で言つ春の様な季節なのだらつ。

自らの肌で、この土地を感じた後に隼は目を開く。

（時間は…毎過ぎつてとこ…るつ）

日がちよつと、真上くらいまでに昇つていてから、隼はそつと推測した。

ならなぜ疑問形になつたのだろうか。

それは太陽の様な物が他にもあつたからだ。

それも複数個あつた。

ちよつと、東西南北に一つずつの計五個。

真上にある物は明らかに太陽であらつ。

直視できない程の光を放つていて。

他の東西南北にそれぞれある物は、円形の型をしてはいるが、微弱にしか光を放っていない。

そこで隼は、やつぱり異世界なのか、と改めて認識…いや、諦めていた。

そして、そういう考えてこるついでに

「ごめんなさい。お待たせしました」

彼女が姿を現した。

彼女は黒を基調とした半袖のカッターシャツと、こちらも同様に黒を基調とした短めのスカート。さらに赤いネクタイを着けている。そのデザインこそ、隼は珍しいと思ったものの、雰囲気は隼の世界の制服その物である。

「えっと、そうですね。まずは自己紹介を。

私のことはリリーって呼んでください」

俺がリリーのことを眺めていると、彼女は恥ずかしそうに話しだした。

「俺は荒神隼と言います。よろしくお願ひします、リリーサン」
やはり隼の口調は堅いものとなっていた。

「リリーでいいですよ」

「いえ、ですが…」

「『さん』禁止…」

「わ、分かりました。リリー」

隼がリリーの勢いに押されたような形で「リリー」と呼ぶこととなつた。

「ふふつ」

突然、リリーが笑いだす。

隼はまるで頭上にクエスチョンマークがあるかのように思える、

不思議そうな顔をしてリリーを見る。

「あーーー、『めんなれこつーーー』

リリーは我に返つたよつて謝る。

「別にいいんですけど、どうしました?」

「えつとね、堅つ苦しきのはなしで、もつと樂にしない?」

「…………リリーがそつする分はかまいませんが、俺は…………」

「だめ?」

リリーが計算したよつな角度での上田遣いを使いながらお願ひする。

隼はその仕草に、ドキリとしてしまつたが無理なことは無理であった。

「すみません。少し事情があつまつして……だけぢにつか、そなれる様にしておきます」

「そつか。まあ、いいや」

そして、そのまま会話が続くのだが、これからはリリーが一気に隼に質問を投げ掛けてくる。

「だけぢさつきと話し方変わつてゐるのねぢつして?」

あと、アラガミハヤト? なんて呼べばいい?

どう書くの?」

「えつと、呼び方は隼でいいです。字は荒野の「荒」に神様の「神」、動物の「隼」はやぶさつて書きます。

それと先程の話し方は、先程はその方がリリーも落ち着くかな、と思いまして」

「ふうーん」

リリーは小悪魔的な笑みを浮かべて隼を見る。

「そつやつて女の子を口説くんだ」

「ぶつーーー」

思ひもよひないコメントに隼はおもわず瞳を曇らしてしまつた。

「いや、いや、いや。そんなことはしませんよ」

「まあ、そういうことにしてあげる」

隼は、どうしたものか、と迷つたが、すぐに頭を切り替えてリリーにお願いをする。

「リリー。出会つたばかりなのに申し訳ないんだけど、少しお願ひがあります。いいでしょつか?」

「なに?」

「近くの街に連れて行ってほしいのです」

「……」

隼はこの世界の情報収集という意味で街に行きたかいと思つている。

だから頼んだのだが、なぜカリリーは一瞬顔を強張らせた様に見えた。

しかし、それは一瞬のことで、彼女の表情はすぐに元に戻る。隼もそれが一瞬のことだったため、あまり気に留めず、見間違いだろうと自分の中で勝手に決め付けていた。

「…………いいよ。

……だけど、隼はどうして自分で行けないの?」

リリーから、返答しづらい質問が隼に問いかげられた。

「……俺さ、かなりの田舎に暮らしていたんですよ。それで訳あって街に行きたいのですが、行き方が分からなくて……」

よくもまあ、こんなに言葉を並ばしたな、と隼は自身で呆れていった。

「…………ふうーん。まあ、いつか

リリーは納得こそしていなかつたが、ありがたいことにそれ以上追求してこなかつた。

… そのはずなのだが、リリーは隼の顔を見続けている。

「えっと…なんですか？」

「 そのね、あつた時から気になつてたんだけどね……その白髪しらがって

地毛？「

「……白髪？

… 誰のことですか？」

「 なに言つてるの？ 自分の髪でしょ？」

隼はその言葉の意味が分からなかつた。

それは、隼の髪は黒色である……はずだから。

「リリー、鏡とかありますか？」

「ん、あるよ。はー」

そう言つてリリーはポケットから小さな手鏡を取り出し、隼に渡す。

隼はそれを受け取つて白いの髪を見る。

「 なつー？」

そこにいたのは白髪の隼だった。

目や耳にかかるないくらい長さも、癖のない髪質は変わっていな

かつたが、色は変わつている。

しかし変わつていたのは、それだけではなかつた。

瞳の色も変わつてゐる。

翡翠色ひすいいろに。

隼はそのまま他の身体の部位も見た。

しかし幸いと直づべきなのか、変わつていたのは髪と瞳だけだつた。

一七 センチメートルを越えた程の身長に少し細めな体型、良くも悪くもない顔の作り、と他はいつもどおりの隼であつた。

ただし顔は髪と瞳の色のせいで、今までとは異なった印象を受ける。

自分で思つのも如何なものかとももつが、隼は黒髪と黒目のようにほんの僅かだが、顔つきが良い様に思つた。リリーが隼と出会つた直後に「白」がどういひと叫んでいたのは、隼のことだったと言つわけだ。

（転移の影響か？）

隼は一つの可能性を考えたが、しかしそれは答えが分からぬとあるまぬけな神のせいで。

だから隼は理由や原因を求めるのではなく、事実を、結果のみを受け入れることにしようと、たつた今思つた。

リリーに、また嘘をついてしまつ。

「そうです。これは地毛です……」

「そつか。じゃあ、よつぱんど良い暮らしができていたんだろつね」

リリーからはよく分からぬ返しがきた。

「? ?

どうしてですか？」

「だつて『白』髪だよ…？」

『白』なんだよ…？」

リリーが怒つた様に声を張り上げた。

しかし隼には、リリーがどうしてこんなにも「白」を強調しているのかが分からぬ。

そもそも本当は今日、白髪になつたばかりなのだから分かぬはずが無い。

「リリー。別に『白』だから別段、変わることはないですよ」

また嘘……いや、今日は適当なことを言つた。

「嘘つ！？」

どうせ私の髪も馬鹿にしてたんでしょう……？」

また髪だった。

リリーはなぜか髪に対して異常に反応する。

その時、彼女の目からは涙が流れていた。

理由は分からぬ。何を言つてあげればいいのかも分からぬ。だけど彼女の必死さは隼に伝わる。

「俺にはリリーが何にそんな必死なのか分かりません

「…えつ！？」

「だから教えて下さい」

沈黙が流れる。

そして

「じゃあさ、少し違うけどいい？」

何を、とは聞かない。

言つたのは一言。

いいですよ、と。

「わ、私の髪を触つて、か、感想を言つて」

リリーは今泣いるせいもあるのか、真つ赤な顔で、一度田の上田遣い 今回はやひりと思つてやつたのではないだろうが で言った。

隼はリリーの田の前に近寄り、正面から彼女の長い髪に手を通そうとする。

「…っ！」

リリーはその瞬間、ビクリとし、田を強く閉じた。

そして隼は無言で彼女の、リリーの髪に手を通す。

リリーの髪質は細くて柔らかく、スラリと手から流れた。

「綺麗」

隼は無駄な言葉の一切を省き、本当に伝えたいことだけを言葉として表す。

けれどリリーはその言葉を疑つてしまつ。

「嘘つ！？」

「いいえ、綺麗です」

「灰色なんだよつ！？」

「綺麗な色です」

「……」

「……」

「……認めてくれるの？」

「ええ、綺麗です」

「…本当に？」

「本当に？」

「本当に？」

「本当に？」

「……」

「……」

「……」

そして、リリーが急に石場の方へ走りだす。

だが、隼は追わない。

なぜならリリーの顔には涙とともに笑顔があつたから。

そして、リリーが戻つて来るまで約十分程度かかったのだが、そ

の間の隼は、

(……俺何言ひてゐの？ 真顔であんなこと言ひて。

ヤバイ。思い出すとかなり恥ずかしい。

てか、よくよく考へると、その前にもかなり恥ずかしいこと言つてゐよ。

…逃げたい。顔を合わしたくねえ。

ヤベッ。顔が熱くなつてきた。

どうしよ？ どうしよう？？

と、そんな考へばかりでずっと恥ずかしがつていた。

リリーが、笑つた様に見えたことについては良い。

お節介かもしけないが口に出して良かつたと心から思つてゐる。

しかし、それとこれとは別問題である。

(うう、穴があつたら入りたい)

「ど、どうしたの？」

戻つてきたリリーが隼の顔を心配そうに覗き込む。

彼女の目は少し赤くなつてゐるようだが、隼はそのことについて何も言わない。

それよりも、顔をみないでほしい、と言いたかった。

「えつと、その、取り乱しちゃつて」「「めんなさい……」

「気にしなくていいですよ」

「ん、じゃあ早速街に送つてあげるよ」

戻つてきたリリーは元気になつておつ、見ていて清々しく思える。

「それはありがたいのですけど……どうやつて？」「

「そんなの決まつてゐるでしょ」

魔具を使つんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349z/>

神の選択と抗う絆

2011年12月31日16時46分発行